

## 『人情噺文七元結』

### 解説

幕末から明治期にかけて活躍し、落語中興の祖と称された名人三遊亭円朝得意の人情噺を歌舞伎化した作品。この左官職人の江戸っ子らしい善意をテーマとする噺は、既に十一代目片岡仁左衛門、七代目市川八百蔵、或いは新派の伊井蓉峰らが舞台化を試みていたが、明治35年10月、五代目尾上菊五郎が榎戸賢治の脚色によって歌舞伎座で初演し、人気狂言となった。現行台本は、戦後に狂言作者の二代目竹柴金作が整理脚色したものが使われている。

元となった「文七元結」は円朝作とされ、『三遊亭円朝全集』（角川書店）にも収められるが、その確証はなく、既存の噺を円朝が再構成したと見たほうがよいであろう（延広真治『落語の鑑賞201』。中込重明『落語の種あかし』）。延広及び中込は、原拠と推される類似説話について、東隋舎『聞書雨夜友』巻一「陰徳にて顕長寿之相話」、『輟耕録』所収の「陰徳延寿」「飛雲渡」などを挙げる。歌舞伎上演時には「三遊亭円朝口演」と掲げられることが多い。

その原作者論議とは関係無く、初演時に脚色者が書いた番付の「語り」には「重ね扇に縁のある故人三遊亭円朝が得意の読み物」とあり、菊五郎（紋＝重ね扇）と円朝（紋＝三ツ扇）との懇意提携が謳われた。ただ菊五郎は円朝のこの噺を聞いたことがなく、舞台化に際し円朝の弟子の円橋を自宅に呼んで噺を聞き、芝居作りの参考にしたという。その他、細部の風俗活写に徹底した拘りを持つ菊五郎は、地理に道理をつけ、また実際の左官職人に取材するなどして職人の癖を学ぶなど、江戸期の世話物とはまた一味違う写実演出を随所に施した。持病の中気を正座に慣れぬ職人の痺れ足に応用した逸話も伝わる。

このような丹念な取材と演出勘案により、恐らくは当時既に失われつつあった「お節介」という名の善意に溢れた江戸っ子の世界観が、臨場感溢れる会話劇によって展開される名作となった。その後、演出をさらに洗練させた六代目菊五郎の型が十七代目中村勘三郎・二代目尾上松緑の所演を経て、現尾上菊五郎をはじめとする当代の世話物役者に伝わっている。故十八代目中村勘三郎は映画界を代表する山田洋次を監督に招いてシネマ歌舞伎を撮った。

### あらすじ

#### ・序幕 第一場 本所割下水長兵衛内の場

本所割下水に住む左官職人の長兵衛。腕は良いが酒と博奕に身を持ち崩し、年越しも危ぶまれる貧乏所帯。女房のお兼とは互いに離縁を口にして、喧嘩の止まぬ毎日を送っている。そんな荒んだ家に居たたまれなくなったのか、十五になる一人娘のお久が家出をしてしまった。孝行娘と評判のお久が親に無断で居なくなるのは余程のこと。これを理由にまた諍いを始める夫婦。そこに得意先の吉原妓楼・角海老の若い者藤助が尋ねて来た。聞けば、お久はいま見世に来て居るといふ。外出用の着物など疾うに質入してしまっている

長兵衛は、お兼の着物を無理矢理剥ぎ取り、藤助から羽織を借りて身を取り繕い、娘を迎えに吉原へ向かう。

・第二場 吉原角海老内証の場

火の車の家計と両親の不仲を愁い、お久は健気にも自ら身を売ろうと角海老に來たのであった。女将のお駒をはじめ見世の者たちは、お久の孝心を褒め、優しく労ってくれる。そこに長兵衛がお久を迎えに來た。長兵衛は娘を見るなり強く叱るが、これをお駒に制され、逆に我が子に身を売らせる放埒さを意見される。はじめて娘の心意を知った長兵衛は返す言葉もなく、自分の至らなさを大いに恥じる。そして今日を限りに酒も博奕も止めることを約束し、お駒から五十両を借り受ける。この金で借金を返し、懸命に働けばお久を迎えに來ることが出来る。長兵衛はお駒と娘に堅く誓って見世を後にするのであった。

・二幕目 第一場 本所大川端の場

ありがたい慈悲の金を懐に女房のもとに急ぐ長兵衛だが、本所の大川端で身投げしようとしている若い男に出くわしてしまう。男は和泉屋の手代文七。大事な掛取金の五十両を何者かに拘られ、主人への申し訳なさに死んで詫言をしようと言うのであった。こうなると放っておけない江戸っ子のお節介。いくら止めても死のうとする文七を見かねて、長兵衛は娘が身を売って作ってくれた金をぶつけるように渡して、名乗りもせずとその場を去っていくのであった。

・元の長兵衛内の場

長兵衛の善意はいくら言い訳してもお兼には信じて貰えない。博奕で拘ったに違いないと決めつけられ、いつもの大喧嘩となる。これを大家の甚八が止めているところに、件の文七が主人の和泉屋清兵衛に伴われてきた。清兵衛は文七の命の恩人である長兵衛に対し丁重な礼を言い、五十両を返却した。実は、文七が盗られたと思ったのは勘違いで、金は取引先に忘れたのだという。今の世に稀有な長兵衛の俠気、その娘お久の孝心を知った清兵衛は、礼としてお久を吉原から請け出して両親の元に返し、さらに暖簾分けさせる文七の嫁にと乞うた。急な話だが、お久は顔を赤らめて肯く。今までの苦労が嘘のような良いこと尽くめで、なにか夢を見ているようだ。文七はかねてから考えていた新しい元結を「文七元結」と名付け、夫婦して売り出したいという。その目出度い門出を皆は祝福する。

(鈴木英一)